
彼と彼女シリーズ

らいとてん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女シリーズ

【Nコード】

N0400P

【作者名】

らいとてん

【あらすじ】

その恋、命懸け。映画のキャッチコピーみたいだと思いながら、今日も彼は彼女と話す。これは、天然な彼女と（時に生命の危機的な意味で）振り回される彼の物語。

彼と彼女と御見舞い品

風に揺れる白いカーテン。

窓の向こうは雲一つない青空だ。

ああ、今日も平和だなあ。

彼が小さく欠伸をして、微睡みに身をまかせようとした、その瞬間だった。

「失礼しまーす。やつほー。来たよー」

彼女がやって来たのは。

「だって、病室に鉢植えは根がつくから駄目って言うでしょ」

彼は、目の前の『それ』を凝視しながら、生返事を返す。

「……ああ」

「でも、私、切り花は嫌いな。だって、アレ、花の死体よ。病室に花の死骸！ そっちのほうがよっぽど縁起が悪いわ」

彼は、熱弁する彼女に苦笑しつつ相槌を打つ。

「……全国の花屋に喧嘩を売っていると思えないけど、まあ、そうだね」

「食べ物とは病状次第では意味ないし。品物を贈っても、好みがある上に、処分に困ってむしろ迷惑になる可能性があるわ」

彼は、目の前のそれが入った容器を見ながら、これもある意味『物』では？ と首を傾げながらも、同意する。

「……それはそうだけど」

「だから、私、頑張って考えたの。後腐れが無くて、貴女の病室を和ませてくれて、根っことか、好みとかが無いものを」

彼は、しげしげと、それを眺め、しぶしぶ頷く。

「……確かに、コレが好きだとか嫌いだとかいう話は聞いたことが無いな」

（……和むかは謎だが）

「でしょ！ しかも、文部なんとか省公認の教科書に載るほどポピュラーなのよ！」

なんとかじゃなくて科学だよ、と指摘しながら、彼は記憶を漁る。

「……そういや、載ってたな。中学校のだったか？」

「手間もかからないわ。一般人向けの育て方の本はなかったけど、多分、水やりだけでいいと思うの」

世話ってやっぱり僕がしないとだめなのかな、と彼は顔を引き攣らせた。

「……あんまり、これの世話の仕方の本ってなさそうだな。学術書ならともかく」

「つてか、普通ないだろ、一般人向けの

『ミドリムシ』

の育て方の本なんて」

「なによ。文句ある？」

唇を尖らせた彼女に、彼は引き攣った笑いを浮かべる。

「……ありません。はい」

「飽きたら病院の池に放してやってね」

彼の脳内に、自分の未来像が浮かび、小さく呟く。

（『どうしたんですか』 『いや、ミドリムシを放しているんですよ』

『そうですか』 『ええ。ハッハッハ』）

「……次は、精神科行きかな」

「ところで、どうしていきなり倒れたの？ 救急車で運ばれたって

聞いて心配したのよ」

心配げに彼を覗きこむ彼女に、彼は苦笑を浮かべた。

「……いや、腐った（君のバレンタインのチョコっぽいけどなんか色々入っていた）ものを食べたのがいけなかったみたいで」

彼と彼女と御見舞い品（後書き）

作者の気が乗った時、ネタが思い浮かんだときに不定期更新します。

ある意味重症

柔らかな風にふわりと白いカーテンが踊る。

さらりとなびく黒髪に彼は眼を細めた。

逆光の中、光に焼かれたこの目に映る彼女は、なんて……。

「まだ退院できないの？」

不満げな彼女に、申し訳なげに彼は言う。

「……ああ」

頬を膨らませ、窓辺でキラキラ光る水槽を眺めながら彼女は呟く。

「ミドリムシはこんなに元気なのに」

つられて水槽で青々と光合成中のミドリムシを眺めながら彼も内心呟く。

「（……いや、ソレと比べられても。大体、ミドリムシは君のお手製はーと弁当を食べてないし）」

その声が聞こえたかのように彼女が振り向く。

「何か言った」

引き攣った表情で彼は片手を振る。

「……いいえ。なんでもありません」

彼女は首を傾げた。

「そう？」

さらりと肩に流れた長い黒髪に目を奪われつつも彼は答える。

「……そうそう」

彼女がカバンから弁当箱とをとりだした。

「今日のテーマはミジンコよ」

彼は知っていた。あのカバンの中は四次元ポケット以上のカオスが

広がっていることを。

「……微生物シリーズ？」

蓋を開けつつ彼女が尋ねる。

「バクテリア・シリーズのほう良かった？」

力いっぱい彼は首を振る。

「……細菌っすか。いいえ、結構です。（入院がますます長引きます）」

唇を尖らせ彼女は言う。

「ちよっとお勧めだったのに」

流されるな、俺、と彼は必死で首を振る。

「（……拗ねた彼女が可愛いとか思うあたり、もう俺は駄目かもしれない。そんなにお勧めなら食べてやってもいいかかと思ってるし）」

箸を用意しながら彼女は尋ねる。

「どうしたの？」

恐る恐る弁当箱を覗きこみながら彼は答える。

「……いや。ところで、今日の弁当はやけに細かいな。ってか『米』まで微塵切りか……」

胸を張って彼女は告げる。

「うん！ お餅みたいにならないよう、粉々感を出すのが大変だったのよ！ しかも、ほら、ちよっとお弁当を離れて見るとモザイク壁画みたいにミジンコの絵が具で作られていることにも気づく！ 私ってなんて芸が細かいのかしら」

顔を引き攣らせつつも彼はありがとうと彼女に言う。

「（……まあ、味は『今日は』普通そうだな。この分なら、布団の下に忍ばせているナースコールを押す必要はなさそうだな）」
お礼を言われて嬉しそうに笑いながら彼女は尋ねる。

「明日は何がいい？」

まだ油断はできないとナースコールを握りしめつつ、彼は思う。

「（……明日も来てくれるのが嬉しいと思うあたり、俺ってかなり重症かも）」

ある意味重症（後書き）

さて、重症なのは、彼女の天然ボケか、彼のメロメロ（古っ）度か
……。

一服と俺と御父様（前書き）

解説がメイン（笑）筆者は茶道に関して全くの素人ですので、間違った解説もあるかもしれません。平にご容赦を。

一服と俺と御父様

「やあ」

着物姿のナイスミドルが爽やかな笑顔を浮かべる。

「ちよっと一服していかないかい？」

茶筌ちやせんが深緑色の液体を混ぜる。

シャカシャカシャカシャカー――。

泡立つ薄茶を眺めながら、彼は銀色の竹を模した楊枝で闇色の羊羹を切る。

さくっぱくっさくっぱくっ――。

馴染んだ味が舌に広がる。

ナイスミドルは和菓子屋の主人であり、若かりし頃は『和菓子王子』の異名をとったらしい。店の二階で茶道教室を開いており、もとの知名度の高さから、奥様方を始め、人柄の良さを慕った男性陣、お菓子を釣られた幼女まで、幅広い生徒を集めている。お菓子に釣られた幼女派の姉は、よく土産として和菓子を買ってきてくれた。

口の中で淡く溶ける和三盆、

四季折々の色や形で目を楽しませる有平糖、干錦玉、

正月限定と毎年楽しみな花びら餅……

甘い思い出も、苦い思い出も、全てが優しい味と共に彼の胸の奥底で息づいている。

和菓子屋ではあるが、教室で出す菓子は、店の品だけではなく、お弟子さんが土産などで持ってきたものもあるらしい。

和菓子屋なのに、土産のお菓子を使っているんですか？ とある時、彼が尋ねたところ、

お弟子さんの土産は、話のタネになるし、美味しくて楽しければいいんだよ、とナイスミドルは微笑んだ。

ハワイに行ってきましたーアローハ・マカデミアンナッツちよこれいと、が出されれば

——新婚旅行 or 彼氏との初海外旅行だったー？ とお姉さん方が盛り上がり、

横浜に行ってきたアルよ、餃子羊羹、が出されれば、

——羊羹にニンニク……甘くて精がつくものが欲しかったのか？ どうした、疲れてたのか？ とおじさま方が弟弟子を^{おとうとでし}氣遣って飲み誘い、

と、お弟子さんたちの交流にも役立っているらしい。前者はともかく後者が美味しいのかは疑問だが。彼女の天然は父親譲りに違いないと、彼はひそかに苦笑した。

姉が参加する茶会に強制召喚されたこともあるため、簡単な作法は分かる。

——とりあえず、菓子を食べて抹茶を飲めばいいのだ。
掛け軸がどーの、花がどーの、主人への挨拶がどーの、とあるら

しいが、

要は美味くて楽しければいいんだろ、が意外とアバウトな彼の記憶力の限界だった。

茶会に参加すること自体は嫌いではなかった。

茶会と言っても非公式の小さなもので、出される菓子は、この店の和菓子であり、気楽なものだった。和菓子は好きだし、それに、振り袖姿のちんまいのが、紅葉の手で茶碗を包み、「どーぞ」とトコトコと運んで来てくれるのが一番の楽しみで――。

ちようど菓子を食べ終わった頃に、すつと御薄^{おうす}が出された。

「頂戴いたします」

くるくると回して、正面から90度の位置にずらす。

ごきゅりごつきゅつごつきゅつ――。

豪快に飲み干す彼に、ナイスミドルが穏やかに微笑みかける。

「最近、うちの娘に彼氏ができたらしいんだ」

げほっげほげほげほ――。

これまた豪快に噎せ込んだ彼に、ナイスミドルは

おやおや大丈夫かい？ と彼の背を摩りながら遠い眼をする。

「最近、付き合いが悪いんだよね。誘っても一緒に茶道の稽古をしてくれないし。オトウサンは寂しいよ。休日ともなったら、裏庭の池で必死にミドリムシ捕まえたり、妙に凝ったミジンコ壁画弁当を作ったりしてるし。アレは、いる。絶対に。悪い虫が」

ミドリムシ捕獲やミジンコ弁当で娘に彼氏ができたと悟るナイスミドルの思考回路が謎だった。

大正解ピンポンパンポーン――。

今、目の前にいます。悪い虫。

固まった彼の耳にナイスミドルがそつと囁く。

「まあ、うちは自由恋愛主義だから、あの子の好きにすればいいと思うよ。でもね——泣かせたら、次は『点^たて』ずに、『盛る』からね」

ナイスミドルは、素敵な笑顔と共に一階に下りて行つた。

しばらくして、軽快な足音共に二階に駆け上がってきた彼女は、畳に両手をつき項垂れた彼に、首を傾げた。

「どうしたのー？」

「いや、久々だったら足が痺れてさ」

腰が抜けたとはいえず、引き攣った笑いで返した彼は、心の中で呟く。

——この恋、命懸け。

【茶^{ちゃ}筥^{せん}】竹でできた抹茶を泡立てる道具。茶会では勇者おばサマーズが一日中、裏方として振るう。少年よ、騙されちゃあなんねえ。可憐な着物姿の別嬪の姉さんが運んでくれた、この抹茶。実際に点^たてて、器の内側に飛んでしまった余分な泡を拭って、盆に並べてるのは、お前の母ちゃんと同じ、強く逞しきナイスマダムだ。（とあるチャリティー茶会にて、奥方に強制召喚された休日のおじさんAが、姉の晴れ舞台を見に来た少年Bに）

【薄^{うす}茶^{ちゃ}】濃茶より薄く点^たてるもの。一人前。「御^お薄^{うす}」と呼ばれるこ

ともある。後頭部が気になるナイスミドルの傍では、後半の「ちゃ」の発音を強めに言うことだ。まあ、「うす」で途切れたとしても、切ない瞳で吾輩の背を撫でるだけのこと、実害はないぞ。（とある会社員宅にて、飼いネコCが、茶道を習い始めた娘Dに）

【お運び】既に点^{はし}てられた抹茶を裏方から運ぶ係り。大人数が参加する茶会においては、目の前で抹茶を全て点^たてるのは無理である。お三客^{さんきやく}と呼ばれる選ばれし勇者以外は、運ばれてきた抹茶を頂くことになる。盆に載せてまとめて運ばれることが多いが、5個は欲張りすぎじゃあないのか。お願いだから着物の裾をふんずけるなよく（とある桜茶会にて、娘の晴れ舞台を見に来た会社員Eが、一個10万の茶碗を運ぶ娘Dに――心の中で）

【茶碗を正面から90度回す】茶道には、飲み終わった茶碗を漱^{すす}ぐ工程がある。建水^{けんすい}と呼ばれる器に、この90度の位置から漱いだ水を捨てる。口を付けた位置から水を流すことで、より茶碗を綺麗にすることができそう。そんなことよりも、90度の説明の際にシュワ●チのポーズをとったのは、教えたという父親の指導なのか、彼女の趣味なのか気になる。（小学校にて、どんなもんだと胸を張る少女Fが、今度お茶会に行くという少年Aに）

【噎^むせる】裏方おばサマーズによる大量生産のお抹茶の場合、茶碗の底部に抹茶の粉が固まって沈んでいることがある。仲直りできなかったココアと牛乳と同じ状況である。非常に残念で悔しい上に、こちらは苦い。通常、【爆弾】と呼ばれる物体だが、何事もなかったかのように飲み込むのがマナー。マナーったらマナー。下手に噎せようものならば、点^たてた裏方から殺気が飛んでくる。（とある桜茶会にて、涙目のおじさんAが、娘の運んできた抹茶を今まさに飲むもうとしていた会社員Eに）

【痺れる】 畳文化独特の病状。患者をつついて慰めるといふ伝統がある。（とある和菓子屋の二階にて、彼女が彼に）

一服と俺と御父様（後書き）

解説付きの小説が増えている気がして真似してみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0400p/>

彼と彼女シリーズ

2011年6月15日15時09分発行